

日本泌尿器科学会第 211 回 熊本地方会

日時: 2026 年 3 月 7 日 (土)

会場: くすのきテラス

手術不適応例腎癌に定位放射線治療を施行した 2 例

石田敏起・坂梨壺成・阿南公輝・松丸右京・岡 保伸
濱崎和代・元島崇信・占部裕巳・三上 洋
渡邊紳一郎 (済生会熊本病院)

2018 年, 日本で「5 cm 以下, 転移のない原発性腎癌」に対する定位放射線治療 (SBRT) が保険収載され, 手術不適応例への適応が広がっている。今回, 腎癌に対し SBRT を施行した 2 例を報告する。症例 1 は 78 歳, 男性。前立腺腫瘍精査中に左腎腫瘍を認め, 淡明細胞型腎細胞癌と診断。2024 年 1 月に SBRT (40 Gy/5 回) を施行し, 縮小を維持している。症例 2 は膀胱腫瘍治療中に右腎腫瘍を認め, 腎細胞癌と診断。2024 年 3 月に SBRT (40 Gy/5 回) を施行し, 経過良好である。両症例とも高齢や併存疾患により手術困難であったが, SBRT により局所制御を得た。SBRT は手術不適応腎癌に対する有効な選択肢となり得る。

キイトルーダ投与後の irAE による 1 型糖尿病発症の一例

高橋えりか・東 俊之介
三浦太郎 (国保水俣市立総合医療センター)

症例は 64 歳, 男性。左腎癌 pT3bN0M0 に対して 12 年前に左腎摘施行後, 再発なく経過しており年 1 回の CT フォロー中であった。X 年 5 月の CT では明らかな転移所見はなかったが, 便潜血陽性を契機に試行した下部内視鏡検査にて上行結腸癌の診断となった。造影 CT での評価の際に膀胱尾部に腫瘍性病変を認め, X 年 8 月に生検施行され, clear cell carcinoma の診断となり, 腎癌膀胱尾部再発並びに上行結腸癌の診断となり, いずれも切除可能と判断し消化器外科にて手術加療を施行された。

術後の補助化学療法としてキイトルーダを導入したところ, 5 コース終了後に血糖コントロール不良となり精査を行った。膀胱尾部腫瘍切除後より 2 型糖尿病発症があったが, 今回キイトルーダ投与により 1 型糖尿病も併発したと考えられた。

irAE による 1 型糖尿病の発症について若干の文献的考察を踏まえ報告する。

FANS-UAS の初期使用経験

田中大樹・村上道洋・里地 葉・桑原朋広 (熊本市市民病院)

【緒言】Flexible and Navigable Suction Ureteral Access Sheath (以下, FANS-UAS) は, 柔軟な先端部と吸引機能を備えた尿管アクセスシースである。初期使用経験を報告する。【対象】2025 年 8 月から 2026 年 1 月までの fTUL 12 例。年齢 45-78 (中央値 69) 歳。男性 7 例, 女性 5 例。患側は右 6 例, 左 6 例。結石径の和は 7.4-43.9 (平均 27.5) mm。手術時間は 56-181 (平均 137) 分。【結果】Stone Free Rate (以下, SFR) は 83.3%。合併症は, 有熱性尿路感染 1 例, 尿管粘膜損傷 2 例。【考察】FANS-UAS の吸引機能で破砕片が除去され SFR は向上し, 腎盂内圧上昇を抑制し合併症を

軽減するとされる。我々は 2 cm 以上または複数の腎結石に使用し単回で良好な SFR を得た。【結語】FANS-UAS は有効なデバイスである。

当院で切除不能尿路上皮癌に対して施行した EV+Pem の 3 例

渡邊 崇・野尻拓矢
陣内良映 (天草都市医師会立 天草地域医療センター)
大塚芳明 (大塚泌尿器科クリニック)

背景: エンホルツマブ ベドチン+ペムプロリズマブ (EV + Pem) は切除不能 / 転移性尿路上皮癌の一次治療として有効性が示され, 実臨床での安全性管理の知見が求められる。

目的: 当院で EV+Pem を導入した 3 症例の治療経過および有害事象を報告する。

対象・方法: 2024 年 3 月 ~ 2026 年 1 月に切除不能尿路上皮癌 3 例へ EV+Pem を施行。RECIST v1.1 で画像評価。主要項目はベストレスポンス, 有害事象 (CTCAE v5.0)。

結果: 年齢 68-74 歳, ECOG PS 0-1。ベストレスポンスは PR 2 例, SD 1 例。PR 到達は C2-C4。主な有害事象は皮疹 G1, 味覚障害 G2, 末梢神経障害 G1, 下痢 G2, 便秘 G1, 倦怠感 G1 で, 休薬・減量・支持療法によりコントロールを試みた。

結論: 当院の 3 例において EV+Pem は皮疹・末梢神経障害への早期介入が重要であるものの良好な奏効と安全性を示した。

尿管管内結石の一例

石松康英・田中 聡・今川大輔・濱田真輔・原 一正
濱田泰之 (熊本中央病院)
浮池昌二郎・黒川慎一郎 (くろかわクリニック)

症例は 68 歳, 男性。近医で施行された CT 検査にて尿管管遺残および尿管管内結石を指摘され, 精査加療目的に当科紹介となった。当院で施行した MRI では, CT 同様に尿管管遺残を認め, 内部に結石を疑う T2 強調画像での低信号陰影を認めた。明らかな腫瘍性病変は指摘できなかった。膀胱鏡検査では尿管管の開存を認め, 軟性鏡は尿管管内へ挿入可能であり, 内部の結石を観察可能であった。以上より尿管管遺残症に伴う尿管管内結石と診断し, 外科的切除 (開腹尿管管摘出術) を施行した。病理結果は urachal cyst で悪性所見なく, 結石成分はシュウ酸カルシウムであった。術後経過は良好で術後に感染の再燃などは認めていない。尿管管遺残症で尿管管内に結石を伴う症例は稀であり, 今回我々は開腹尿管管摘除術を実施したので, 若干の文献的考察を含めて報告する。

膀胱原発 MALT リンパ腫の 1 例

高橋祐貴・前田喜寛・上川舞乃・神尾琢克伸
村上栄敏・鯨島智洋
菊川浩明 (国立病院機構 熊本医療センター 泌尿器科)

症例は49歳、女性。近医検診エコーにて膀胱腫瘍を指摘され精査加療目的に当院紹介された。膀胱鏡所見は膀胱頸部から三角部にかけて粘膜不整、表面平滑な腫瘍病変が認められた。MRI所見では頸部から三角部にかけて比較的均一な信号の約3cm大の軟部腫瘍が認められた。そこでX年X月膀胱腫瘍に対しTUR-Bt施行した。病理結果はMALTリンパ腫であった。残存腫瘍に対して放射線照射後当科および血液内科にて外来フォロー中である。

MALTリンパ腫は粘膜関連臓器に発生するB細胞リンパ腫であり、濾胞辺縁帯に存在し形質細胞へ分化する傾向を持っている低悪性度のリンパ腫であり、長期間局所にとどまる傾向があり、緩徐な経過をたどることが知られている。発生頻度として膀胱では0.2%と非常に稀とされる。今回当院において膀胱原発MALTリンパ腫の1例を経験した。当日は若干の文献的考察を加えて報告予定である。

転移性前立腺癌フォロー中に進行性膀胱癌の併発が判明した1例

坂梨竜成・石田敏起・阿南公輝・松丸右京・岡 保伸

濱崎和代・元島崇信・占部裕巳・三上 洋

渡邊紳一郎（済生会熊本病院）

【症例】66歳、男性。排尿障害を契機に発見された多発骨転移・腹膜播種を伴う転移性前立腺癌（mCSPC）に対して、トリプレット治療・放射線治療（前立腺と骨転移カ所への照射）を含む集学的治療を行った。経過中、前立腺癌の局所進行が原因と思われる尿管閉塞にて腎後性腎不全を来した。一方でフォローMRIにて膀胱癌も疑われ、TUR-Btにより、筋層浸潤性膀胱癌（pT2、高異型度尿路上皮癌）が判明した。膀胱癌に対しては根治治療目的、前立腺癌については原発巣制御および尿路閉塞リスクへの対応の観点から、ロボット支援下膀胱全摘・回腸導管造設術（RARC・ICUD）を施行した。今回、転移性前立腺癌と局所進行膀胱癌を併発した症例に対して、外科的介入が集学的治療の一環として有用である可能性が示唆された。

ペムブロリズマブによる加療が奏功した女性尿道癌の1例

眞鍋笙之介・富永成一郎・宮本 豊（熊本労災病院 泌尿器科）

【症例】68歳、女性。【主訴】排尿困難【現病歴】X-1年7月より排尿困難が出現し、前医で自己導尿管理となっていた。X年2月、導尿困難のため精査目的で当院紹介。骨盤部造影MRIにて尿道領域に75mm大、左外腸骨領域に60mm大の不整腫瘍を認めた。尿細胞診は陽性。尿道生検の結果、浸潤性尿路上皮癌と診断された。【経過】進行性尿道癌として、同年3月よりGC療法を開始。当初は原発巣・リンパ節ともに縮小を認めたが、8コース後のCTでリンパ節の増大を認め、X+1年2月にペムブロリズマブを導入した。計10コース施行後、リンパ節の縮小を確認し治療終了とした。X+3年現在、無再発経過観察中である。【結語】女性尿道癌は稀な疾患であり、集学的治療が重要となる。本症例は免疫チェックポイント阻害薬が奏効し、長期無再発生存を得られた貴重な1例であり、若干の文献的考察を交えて報告する。

皮膚転移をきたした前立腺癌の1例

山村智子・山中広太郎・中熊健介（人吉医療センター）

【症例】症例は93歳、男性。X-9年前立腺癌と診断され、以降

CAB療法を行っていた。X-1年1月頃より左下腿に紅色結節が複数出現し、近医皮膚科で外用剤等の加療をされていたが、最大のものは8cmにまで増大した。そのため悪性疾患の皮膚転移が疑われ、7月当院皮膚科紹介となり、皮膚生検を施行した。生検の結果は真皮内で異型細胞が充実性に増殖しており、未分化癌の所見であった。免疫染色はCytokeratinのみ陽性であり、その他のPSAやS-100、Melan-A等は陰性であった。原発巣の精査や加療目的に12月熊本大学病院皮膚科紹介となり、PET-CT等で前立腺癌以外の原発巣を示唆する所見に乏しく、協議の結果、前立腺癌皮膚転移の診断となった。前立腺癌の皮膚転移はきわめて稀であるため、若干の文献的考察を加えて報告する。

RARP術中の外腸骨静脈損傷に対して症候性ガス塞栓を回避できた1例

石崎宏志・二口芳樹・福井秀幸（熊本総合病院 泌尿器科）

症例は67歳、男性。X-2年当院で左尿管癌術後でフォローされていた方。検診PSA高値のためMRI撮影し前立腺癌疑いの診断。X年8月前立腺生検の結果前立腺癌GS4+4の診断となった。X年10月RARP施行したところ、尿管癌術後の癒着により、左外腸骨静脈の剥離中に血管損傷を認めた。血管修復後前立腺摘出は問題なく終了したものの、術中のエコーで左大腿静脈にCO₂ガスの貯留を認めた。閉創後頭低位のまま静脈穿刺をおこない血管内のガス吸引を施行。改善に乏しく、他科との相談の結果、挿管管理のままICU入室とした。術後1日で抜管、2日で退室とした。特にガス塞栓による症状は認めなかった。RARPでは頭低位のため肺塞栓等の報告は少ないが、十分注意が必要であると考ええる。今回CO₂ガス塞栓に対して予防的対応を行った1例を経験したので、文献的考察も交えて報告する。

くまもと県北病院における転移を有する去勢感受性前立腺癌（mHSPC）に対する治療実態の検討

有働和馬・牧野 耕・近浦慶太

山口隆大（くまもと県北病院 泌尿器科）

【目的】当院におけるmHSPC患者の治療選択と予後を解析し、現在の治療戦略と課題を明らかにする。【対象と方法】2022年～2025年に初期治療を開始したmHSPC患者56例を対象に、患者背景、治療内容と成績を後方視的に検討した。【結果】年齢中央値73.5歳、PSA中央値152.5ng/mlであった。CHAARTED基準High 26例/Low 30例、LATTITUDE基準High 31例/Low 25例であった。初期治療の内訳は、ADT/CAB 16例、ダブルット療法33例、トリプレット療法4例、放射線治療併用は10例であった。24カ月時点のPSA非再発率は69.8%であり、High volume群で有意に予後不良であった。【結論】当院でもガイドラインに準じた併用療法への移行が進んでいた。High volume症例においては、トリプレット療法などの強力な初期治療の介入が必要と考えられた。

前立腺癌精査中に偶発的に診断された精巣神経内分泌腫瘍の1例

桂 康裕・西澤秀和・原田成美・穴見俊樹・倉橋竜磨

馬場理也・村上洋嗣・矢津田旬二・神波大己（熊本大学病院）

【症例】58歳、男性。下腹部痛の精査でPSA 16.85 ng/mL、MRIにて前立腺癌を疑う所見を認めた。生検の結果、Acinar

adenocarcinoma (Gleason score 4+5=9) と診断された。病期診断目的の造影 CT で前立腺癌の転移は認めなかったが、偶発的に右陰嚢内に結節性病変を認め、精巣腫瘍が疑われた。右高位精巣摘除術を施行し、病理組織学的に高分化精巣神経内分泌腫瘍 (NET) と診断した。その後、前立腺癌に対し前立腺全摘術を施行し、現在いずれも無再発で経過観察中である。

【考察】精巣 NET は全精巣腫瘍の 1% 未満、全 NET の 0.2% 未満と稀な疾患であり、転移性 NET との鑑別が極めて重要である。自験例は画像評価より原発性精巣 NET と診断した。既報からは前立腺癌との関連は乏しく、偶発的な併存と考えられた。今回の症例について文献的考察を加え報告する。

精巣破裂に対して固有鞘膜フラップを用いて修復術を行った 1 例
村上道洋・里地 葉・田中大樹・桑原朋広 (熊本市市民病院)

【症例】17 歳、男児。野球の試合にキャッチャーとして出場中、ファールボールが左陰嚢に直撃し、左陰嚢の腫大および疼痛を認めたため当院へ救急搬送された。【来院時現症】vital stable。精巣 US では左精巣白膜断裂を示唆する所見を認め、MRI 検査においても同様の所見が確認された。【経過】精巣破裂の診断にて、受傷当日に緊急で精巣白膜修復術を施行した。精巣固有鞘膜を開放すると白膜の断裂を認め、浮腫状となった精巣実質が脱出していた。精巣組織の白膜内への還納は困難であったため、精巣固有鞘膜フラップを用いて白膜欠損部を被覆し、修復を行った。【考察】精巣破裂において、浮腫状の精巣組織を白膜内に還納することが困難な場合や、修復後の内圧上昇によるコンパートメント症候群が懸念される場合がある。精巣固有鞘膜フラップを用いた修復術は、精巣温存を図るうえで有用な術式の一つとなり得ると考えられた。